ヴァージニア植民とは何だったのか
―― 公式文書から見るヴァージニア植民 ――

高　橋　正　平

序

1606年４月10日発布のジェームズ一世の勅許状により本格的に活動し始めたロンドン・ヴァージニア会社は1624年に解散するまで合計三回の勅許状を発している。いわゆる公式文書によるヴァージニア植民宣言である。第一勅許状後イギリスはヴァージニア植民を国内外に宣言し，植民活動が始動する。イギリスの海外進出はもとよりヴァージニア植民が最初ではない。Thomas Hariot, Richard Hakluyt, Samuel Purchas 等の記録が雄弁に物語っているように，イギリスはアメリカのみならずヨーロッパ大陸への進出をも企ている。そもそもイギリスの海外進出の目的は何であったのか。ジェームズ一世の勅許状が宣言しているように，植民の目的は異教徒へのキリスト教布教にあったのか。ヴァージニア植民の宗教的性格を強調した Perry Miller とは異なり[1]，私は異教徒へのキリスト教布教は二次的な問題で，植民による金銭的な利益こそがヴァージニア会社及びヴァージニア植民の第一の主要目的であると考えている。この問題の解明にあたり私はヴァージニア会社・植民に関連する一次資料を本論の研究対象とするが，その資料には以下がある[2]。

⑴　会社成立に関わる王と枢密院によって発布された特許状，勅許状及び命令書。

⑵　宮廷管理書に記録されている冒険商人の活動報告書。ここには植民，土地の認可，その他植民を推進し，収入増加のための経済政策・計画が記録されている。

⑶　植民事業を行うに際し，会社が植民統治者へ与えた依頼，植民者への規

則，指示。

⑷　植民地からの報告，宣言書，書簡，不平。

⑸　一般人から植民事業への信頼を得，冒険商人を確保し，会社の会員の関心，支持を維持するために出版した宣伝書，広告，宣言書，パンフレット，説教。

⑹　会社の会員と個々の植民者との間の私的往復文書。

⑺　17世紀の他の会社や諸都市の記録と政府役人かヴァージニア会社の業務には直接関係していない人達の記録。

本論では，公的文書によるヴァージニア会社・植民に関する公的文書と私的文書から植民事業の実態解明にあたるが，主として上記の⑴⑶⑷を中心にして論を進めたい。最初ジェームズ一世の三編の勅許状，種々の指示・命令・布告と及びヴァージニアからの書簡・報告書，及び Hariot のヴァージニア報告書『新しく発見されたヴァージニアに関する簡潔にして真なる報告書』(1588)，Hakluyt の『貴重な価値のあるヴァージニア』(1609)，William Strachey の『イギリスヴァージニアへの旅の歴史』(1612)，Purchas の『ハクルート遺作』(1625) 等からヴァージニア会社及びヴァージニア植民の目的，実態を明らかにしたい。

1

ジェームズ一世の勅許状は1606年 4 月10日，1609年 5 月23日，1612年 3 月12日の 3 回にわたって発布されているが，特に最初の勅許状はヴァージニア植民の目的を明示したものとして注目に値する。ヴァージニア植民は1585年，87年の Walter Ralegh によるロアノーク島植民失敗後，ジェームズ一世が勅許状を発布することによってそれまでの私的な事業から国家的事業へと方針を変え，ヴァージニア植民に対し国家が主導権を握ったのである。ジェームズ一世がアメリカ植民を認可した背後にはイギリス国内の社会的な理由があった。対外的にはカトリック大国スペインへの対抗意識とイギリスのヨーロッパ諸国への経済的依存からの脱却があり，ヴァージニア植民によりイギリスは自国経済の自

給自足を望んでいた。この問題については Hakluyt が『西方植民論』(1584) で言及しているが[3]，彼によればイギリスの毛織物等の市場開発，余剰物資の供給地，余剰人口に由来する失業者・浮浪者問題及び対スペイン戦略基地としてのアメリカ植民の重要性からしてヴァージニア植民はどうしても必要であった。ヴァージニア植民はイギリス国内の社会問題解消と同時にイギリスの国威発揚的な性格を伴った海外進出であったとも言える。イギリスの国威発揚と国内の社会問題解決を一気に狙ったヴァージニア植民は，ジェームズ一世の勅許状によってロアノーク島植民失敗後のイギリス国民に新たな局面を与えることになった。ヴァージニア植民の中心的存在となるジェントルマンの台頭，余剰人口の出現，植民事業へのロンドン商人とジェームズ一世王朝の関心があいまって，ジェームズ一世は1606年 4 月最初の勅許状を発布し，ヴァージニア植民を国家事業として認可した。海外植民という大事業を行うに際し最大の問題点はその運営資金である。いかにして海外植民に必要な資金を集めるか否かが植民成功の鍵を握っている。Ralegh のロアノーク植民が物語っていたようにもはや海外植民は個人の資金ではとうていやり終えることはできない。そためにできるだけ多くの植民賛同者から資金を集めるために共同出資会社が設立されることになった。会社はあらかじめ価格を決め，賛同者に株式を配当して資金を集め，植民の利益を出資者に配当する方法をとったのである。共同出資会社設立の趣旨からヴァージニア会社の全容が浮かび上がってくる。ヴァージニア会社はロンドン商人のヴァージニア植民での利益追求とジェームズ一世王朝がかかえる種々な問題解消が合致したことから生まれた商業的色彩が極めて強い会社であった。ところが1606年の第一勅許状を見ると，会社の商業的性格は希薄化され，代わりに会社の宗教的使命が全面に出されている。第一勅許状は植民地の地理的範囲の明示，ヴァージニア会社とプリマス会社の植民領域設定，王と王の代理人の権限を明示した後で次のように言う。

> Wee, greately commending garciously accepting of theire desires to the furtherance of soe noble a worke which may, by the providence of Almightie God, hereafter tende to the glorie of His Divine Majesties in propagating of

> Christian religion to suche people as yet live in darknesse and miserable ignorance of the true knowledge and worshippe of God and may in tyme bring the infidels and salvages living in those parts to humane civilitie and to a setled and quiet govermente, doe by theise our lettres patens graciously accepte of and agree to theire humble and well intended desires; (4)

「神の知識と崇拝の暗闇と不幸な無知の中にいまだ住んでいる人々へキリスト教を布教」し,「やがてはかかる地に住んでいる異教徒と未開人を人間的な礼儀正しさと落ちついた静かな統治」へと至らす「かくも高尚な事業の促進」とうたう上記の文章には商業的な会社の姿は全く見られない。ヴァージニア植民者へ強い影響を及ぼした Hakluyt の『西方植民論』第一章でも彼は，英国の西方植民の第一の目的を「キリストの輝かしい福音を宣べ伝え」「正しい，完全な救いの道に引き入れる」こととし，これが「まず真っ先に行われるべき主要な仕事」とし，いかにキリスト教徒にふさわしい使命を植民において行うかを強調している(5)。ジェームズ一世の第一勅許状はこのような流れを汲み，最初にキリスト教の布教を全面的に掲げる。一般の植民者や冒険植民者がいかなる理由からヴァージニア会社へ参加し，出資したかと言えば，それはまぎれもなく利益であった。ヴァジーニア会社を「共同出資会社」としたこと自体が会社の性格を如実に表している。しかしながら会社の使命をキリスト教布教とした勅許状の真の意図はどこにあったのか。第一勅許状にはヴァージニアでの金，銀，銅発見の際して，金銀に関してはその 5/1，銅に関しては15/1をロンドンの親会社に納めなければならないと規定されていた。ヴァージニア会社としてはこれが出資者への配当にあてる利益であった。しかし第一勅許状は全体的にはヴァージニア会社植民の宗教的使命が特記され，一般の出資者や植民者の最大の関心事である利益配当についてはあまり触れていない。公式の勅許状で言及するには余りにも露骨すぎる嫌いがあったのかもしれないが，それにしても出資者が最も知りたい「利益」に関する記述は希薄である。東インド会社同様ヴァージニア会社への最大の関心事は投資からの配当であった。会社が期待していた金銀銅は発見されなかったが，タバコの発見と国内でのタバコ需要から

くるタバコ栽培への関心はやはりその利益であった。Ben Jonson は『東行きだよおー！』（1605年）で「ヴァージニアには金が豊富である」と書き，また Michael Drayton は「真珠や金を得るために，我々の真珠や金を手にするために，地球唯一の楽園ヴァージニアよ」（Ode To the Virginian Voyage, 1606）と書いたが，これらは当時の一般人のヴァージニア像である。ヴァージニアは人々に一攫千金の夢を実現させてくれる場所であったのである。1606年12月20日発布の『規約，指示，命令』では国王直属のヴァージニア評議会の設置とその役員選出について記されているが，そこでもキリスト教布教について「神の真の言葉と神への奉仕とキリスト教が説かれ，植え付けられ，用いられるべき」ことが触れらている[(6)]。

1609年５月23日，ジェームズ一世は第二勅許状を発布する。この勅許状は Sir Francis Bacon の協力を得て Sir Edwin Sandys が作成したと言われているが，ジェームズ一世の恣意的権力による統治から被統治者の同意と植民者の労働の結果を享受する権利重視の統治を容認したものである。注目すべき点は資金確保のために株式を公開し，自費でのヴァージニア渡航者は株主の地位が保証され，資金のない者はヴァージニアでの７年の労働条件で会社の年季契約奉公人として渡航できた。７年の奉公があける際に奉公人は自由となり，さらに会社の利益の配当と最低100エーカーの土地の配分を受けることになった。この勅許状では，植民者にヴァージニアでの金銀銅等の発掘権を与えると共に，多くの職人，同業者組合にヴァージニア植民に参加させていることも注目に値する。ヴァージニア植民の目的がより明確化されている点で第二勅許状からヴァージニア会社の全容がうかがい知れるが，ヴァージニア会社組織の運営強化をねらい国王の介入を最小限にくいとめ，植民者個人の権利を重視した点でアメリカ憲法の原点を指摘する人もいる。その第二勅許状でも最後にヴァージニア植民の主要な目的は異教徒の改宗が記されている。

> And lastly, because the principall effect which wee cann desire or expect of this action is the conversion and reduction of the people in those partes unto the true worship of God and Christian religion, ...[(7)]

「神と真の宗教へのかかる土地に住む人々［インディアン］の改宗と救済」こそがヴァージニア植民が本来目指すべき大目的なのである。会社の商業的性格を明確にしたあとで最後に会社の宗教的使命をわざわざ付け加えることで会社はヴァージニア植民の大儀名文を植民関係者に訴えている。1609年 5 月，ヴァージニア総督 Thomas Gates へのヴァージニア評議会の指示・命令・規約ではヴァージニア統治のために様々な助言がなされているが，カトリック大国スペインを意識したプロテスタントとしてのイギリス国教会の布教活動の重要性を強調し，無神論，冒涜，ローマ・カトリック教，教会分裂は神の名誉と教会の平和と安全のために戒めてとして処罰されねばならないと言う。更にヴァージニア植民の最も敬虔・高尚な目的として原住民インディアンのキリスト教改宗を掲げ，実際にインディアンの子供をキリスト教に従って教育すべきことを指示する。

> You shall, with all propensenes and diligence, endeavour the conversion of the natives to the knowledge and worship of the true God and their redeemer Christ Jesuis, as the most pious and noble end of this plantacion, ...(8)

Thomas Gates への会社からの指示には植民の強化のために南洋（太平洋）航路・鉱山の発見，交易，貢物，植民者のワイン，ピッチ，タール等生産向上が言及されている。ヴァージニア植民への大きな期待が寄せられているにもかかわらず，キリスト教布教をヴァージニア植民の第一の目的としていることに植民事業の複雑さが窺える。

1612年 3 月12日発布の第三勅許状は勅許状としては最後のものである。この頃にはヴァージニア植民がいかなる結果をもたらしつつあるかが徐々に明らかになりつつあったが，最初に「キリスト教の布教と野蛮な人々を文明と真の人間へ教化すること」(9) に触れているのである。興味深いことにこの第三勅許状では植民事業遂行のための資金集めに宝くじ導入の決定をしている。一方では宝くじによる植民資金集め，他方ではキリスト教布教といったように「聖」と「俗」が混在したヴァージニア植民の実態がかいま見れる。ヴァージニア会社発

布の三回にわたる勅許状及び会社からの指示・命令等から本来は商業的性格の強い会社が宗教という大義名分を全面に持ち出し，植民の利益追求を背後に押しやっていることがわかる。ヴァージニア会社は本来は株式会社であり，株式会社は株主への利益配分の義務がある。キリスト教布教だけの名の下で一般人が植民事業へ参加をしたかははなはだ疑問である。もちろん信仰心に厚い人も中にはいたであろうが，Ben Jonson や Drayton が抱いていていたヴァージニア像が一般人の間ではより強かった。ヴァージニアと言えば「金」なのであり，これはヴァージニア植民以前からイギリスがヴァージニア植民に抱いていた妄想でもあった。以上はヴァージニア植民に関する公式文書であるが，ヴァージニア会社による「宣言書」と実際にヴァージニアへ行った人々の報告書や書簡ではヴァージニア植民はどのように報告されているのであろうか。次にこの点について触れてみたい。

2

1606年，1609年，1612年の勅許状発布後，ヴァージニア会社は当初の予想に反した植民の実状を否定し，さらなる植民への関心を引き起こすために「宣言書」と報告書を出版する。実際1606年の植民以来，植民が目指していた現地の政情の安定，経済的繁栄及びインディアンとの和解は期待していたほどではなかった。そのような状況のなかで「宣言書」や報告書は勅許状に沿い，ヴァージニア会社を全面的に支援する。これらは出版年代順には以下の通りである。

⑴　Robert Johnson: *Nova Britannia*（1609年２月）
⑵　Robert Gray: *A Good Speed to Virginia*（1609年４月）
⑶　*A True and Sincere Declaration of the Purpose and Ends of the Plantation begun in Virginia*（1610）
⑷　*A True Declaration of the Estate of Virginia*（1610）
⑸　Robert Rich: *News from Virginia*（1610）
⑹　Robert Johnson: *The New Life of Virginia*（1612）

⑺　William Strachey: *For the Colony in Virginea Britannia*（1612）
⑻　Alexander Whitaker: *Good News from Virginia*（1613）
⑼　Ralph Hamor: *A True Discovrse of the Present Estate of Virginia*（1615）
⑽　*A Declaration of the State of the Colonie and Affairs in Virginia: with the Names of the Aduenturers, and Summes Aduanced in that Action*（1620）
⑾　Edward Waterhouse: *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia*（1622）

この他にも当時の著名な説教家によるヴァージニア会社擁護の説教やヴァージニア植民者・探検家からの報告書－Hariot の『ヴァージニア報告』，Thomas Smith の『ヴァージニア入植についての真実の話』，William Strachey の『イギリスヴァージニアへの旅の歴史』，George Percy の『1606年ヴァージニア植民談話から集められた観察報告』 等－及び私信があるが，本論では上記の「宣言書」，ヴァージニア植民参加者達からのヴァージニア植民についての報告書からヴァージニア植民の実状を見てみたい。上記の⑸の Rich の『ヴァージニア便り』はヴァージニア植民称賛の韻文で，⑺の Strachey の『イギリスヴァージニア植民のために』はヴァージニア植民運営・管理に関わる法律集で，本論とは直接関係がないので取り上げない。他の宣言書，報告書はヴァジーニア会社の宣伝文書で内容は明白である。それらは，勅許状との関係から見るとすべてが勅許状に沿った内容で，ヴァージニア植民賛美の文書であることがわかる。これらの宣伝文書ではヴァージニア植民の正当化，目的，利益について論じられ，ヴァージニア植民の先行きが疑問視されるなかで，出資者及び植民者に植民成功の確約が与えられている。最初に⑴の『新しいイギリス』を見てみたい。Johnson が『新しいイギリス』を発表した1609年はヴァージニア植民にとって危機の年であった。1606年に勅許状を得て，ヴァージニア会社は同年８月と10月に植民者をヴァージニアへ送るが植民は成功とは言えなかった。同年12月の Christopher Newport 等による植民は一応の成功を収める。Newport は1608年６月に帰国するが，ヴァージニアでは指導者が次々と交代し，ヴァージニア植民の前途が危ぶまれていた時期であった。しかし，この機会にヴァージニア会

社は巻き返しを狙い，次々と「宣言書」，報告書，説教による宣伝活動を開始した。Johnson の『新しいイギリス』はかかる背景から書かれた宣伝文書である。そのなかで当然のことながら Johnson はヴァージニア会社・植民を全面的に支持する。会社はそれをすぐさま出版し，ヴァージニア植民参加を計画する人達及び出資予定者に希望と安堵の念を与えようとする。では Johnson はいかにしてヴァージニア植民を擁護しているのか。Johnson は，最初にカトリック側（特にスペイン）からのアレグザンデル一世の寄進状によるアメリカ大陸への領土権主張には何も歴史的根拠がないことを主張し，イギリスのヴァージニア進出には何ら問題はないと指摘する。その後 Johnson は，ヴァージニア植民の現状，目的，今後の取るべき道を指摘する。結果としてヴァージニア植民は十分に植民の価値があり，最初は利益がないように見えるが，決してあきらめることのないようにとの激励で「新しいイギリス」は終わっている。Johnson にとってヴァージニア植民という「崇高な承諾できる事業」は，「神の王国と神の真実の知識をいまだ真の光が眼前に輝くのを見たことのない未開の盲目的な何百万もの男女の間に広め，彼らの精神を教化し，その魂に安らぎを与える」[10] 事業である。これは既に見た勅許状が挙げていたヴァージニア植民の第一目的であるキリスト教のインディアンへの布教と一致している。ヴァージニア植民がまずなすべきことは植民地でのキリスト教の推進と布教である。キリスト教に無知な原住民はいわば暗闇の中にいるのも同然で，その暗闇から原住民を救い出し，教化するのはキリスト教の義務であると考える。原住民のキリスト教徒への改宗は神の王国推進に至り，「迷える羊」である原住民を救うのは神からイギリス国民に与えられた使命でさえある。このように Johnson はヴァージニア植民のキリスト教的使命を明確にする。ヴァージニア植民は世間で流布されているような金銭的利得を目的とした植民ではない。何はともあれ最初に考慮すべきは異教徒のキリスト教への改宗であり，その改宗を通してイギリスは神の国建設に貢献する。これはヴァージニア会社にとっては崇高な植民のための大儀名文となる。次に Johnson はヴァージニア植民の目的をイギリス国王の名誉とイギリス王国拡張とする。ヴァージニア植民は単なる商業的事業にとどまらず，イギリス国王とイギリス国家のためというより大きな視点からヴァージニ

ア植民がとらえられる。それによって，植民者に愛国心を植え付け，さらにはスペインにとって代わる世界のリーダーとしてのイギリスを強く人々に訴えることを忘れない。

> But for my second point propounded, the honour of our King, by enlarging his Kingdomes to proue how this map tend to that: no argument of mine can make it so manifest, as the same is cleere in it selfe; Diuine testiments shew, that the hour of a King consisteth in the multitude of subiects, and certainely the state of the Iews was farre more glorious, by the conquests of Dauid, and under the ample traigne of Solomon, then euer before or after:[11]

ジェームズ一世はダヴィデ王，ソロモン王にたとえられ，ヴァージニア植民は旧約聖書のダヴィデやソロモンの他民族征服に比較される。ジェームズ一世のアメリカ植民には前例があることが指摘されるのである。王の名誉は臣下の増大にあり，そのためには他国の植民も許されるという論理である。予言者ダニエルは，多くの者を正しい道へ導き入れる征服により永遠に光り輝いた。そのようにジェームズ一世もヴァージニア植民によって異教徒を義の道へ導くことにより歴史に永遠にその名を留めることになる。Johnson のこれらの言葉にはジェームズ一世を意識した愛国的な王への賛辞が伺われる。聖書の人物と彼らの行動を巧みにヴァージニア植民者と比較し，ヴァージニア植民の正当化を訴える Johnson の手法は以後の宣伝文書のさきがけとなる。特に説教家達によるヴァージニア植民擁護はすべてこの手法によっており，以後ジェームズ一世のヴァージニア植民と植民者は旧約・新約の様々な行動と人物にたとえられる。それは「神の書」からのお墨付きである。この愛国的心情は更に続き，ヴァージニア植民により王の英知，威厳，名誉は世界の果てまで広がる[12]。スペインを意識したイギリス国民へ対する国威発揚の意図をも狙った Johnson のヴァージニア植民の目的は雄弁に述べられる。Johnson は，イギリス国民のヴァージニア植民への熱意がさめつつあったなかでヴァージニア会社及びジェームズ一世側に立ち，ヴァージニア植民の正当性・有用性を強く国民に訴える。ヴァージ

ニア会社は本来は商業的な株式会社であり，出資者・植民者の目的は見返りとしての「利益」にあったことは確かである。それにもかかわらずJohnsonはさかんに宗教的使命とイギリスの国威発揚を植民の目的として挙げ，イギリス国民を激励する。それではJohnsonはヴァージニア植民の利益に関して何も触れていないのであろうか。確かに彼も利益については触れている。その前にJohnsonはヴァージニアの穏和な気候，豊富な資源を称賛し，植民に不足するもは何もないことを強調し，ヴァージニアを「この世の楽園」（B 2）とさえ呼んでいる。Johnsonはヴァージニアの土地の価値は今はないかもしれないが，時間と資金があればいずれは良くなると言う。

> And howsoeuer those grounds in Virginia are now but little worth indeed, yet time and meanes will make them better, considering how they passe our ground in England, both in regard of the soile and climate, fitter for many precious uses;[13]

Johnsonが『新しいイギリス』を書いた1609年2月はヴァージニア植民が始まって以来2年が経過していたが，ヴァージニアでの植民実績は期待していたほどではなかった。とにかく植民者をヴァージニアへ送るには資金が必要である。しかしヴァージニアでの経過が思わしくない状況のなかで資金投資への見返りがあるかは疑わしかった。Johnsonはこれらの事情を十分に把握したうえで，最初に植民の実態とはほど遠い宗教的使命を植民の目的に掲げ，その後に植民事業の本来の目的である利益的活動に触れる。この世の楽園であるヴァージニア植民による利益は何なのか。Johnsonは金銀には触れない。12ポンド10シリングの出資によって出資者は7年後に少なくとも500エーカーの土地を取得できるのである。とにかくただちにヴァージニアへ行き，先発隊を支援することが先決であり，その結果によってさらに株の配当も可能となる。ヴァージニア植民は「見込みのある非常に豊かなすばらしい重要な出来事」[14] であり，今そのチャンスを逸するべきではない。Johnsonはヴァージニア植民の利益については直接的には言及しない。ただ何もしないでいるよりはまず行動せよと訴え，そのためにヴァージニア会社に投資を呼びかける。Johnsonの主張はヴァージ

ニア植民宣伝文書としては模範的な文書と言える。聖書からの植民の正当化，スペインへの対抗意識からくる国威発揚，更にはヴァージニア植民投資からの確実な収益等，人々の関心事を彼は巧みに取り上げている。Johnson は直接にはヴァージニアへは行ったことはないのだが，ヴァージニアの風土や豊かな自然についてはあたかも本人が見てきたかのような描写で，説得力のある内容となっている。以後のヴァージニア植民宣伝文書は Johnson の宣伝文書と同様の手法で書かれることになる。次に同じ1609年４月出版の Robert Gray の『ヴァージニアへのよいスピード』を見てみたい。

3

Gray の『ヴァージニアへのよいスピード』は Smith の『ヴァージニア入植についての真実の話』と Johnson の『新しいイギリス』についで，ヴァージニア植民に関する三番目の出版物である。Gray の『ヴァージニアへのよいスピード』は２ヶ月前の Johnson の『新しいイギリス』と内容が酷似しており，Gray は『ヴァージニアへのよいスピード』を書くに際し Johnson の『新しいイギリス』を読んでいたことは十分に予想され，実際 Gray は Johnson の『新しいイギリス』に言及している。Johnson 同様 Gray も旧約聖書の一節をヴァージニア植民に適応することから始める。Gray は，ヨシュアがヨセフの子供達の企てに許可を与えたのみならず祝福も与えたように，ジェームズ一世はヴァージニア植民者に与えてくれたと言う。いかにしてヴァージニア植民事業を聖書に適応し，読者に強いインパクトを与えるかは宣伝文作者の力量次第であるが，Gray は Johnson 同様ヴァージニア植民の宗教的使命を強調することを忘れはしない。序文で「神の栄光」の促進と祖国の栄光と富みの拡大に従事する人は永遠の記録に残ると述べ，ヴァージニア植民の目的を明確にする。それに反し，ただ現世的・世俗的な金銭目当ての植民者はそれだけで終わってしまうはかない存在である。Gray は「徳よりも金，名誉より快楽，英雄的冒険より快楽趣味的な安全を好む人たちは金と共に滅び，快楽と共に死に，永遠の忘却のなかに葬られるだろう」と言う[15]。このように述べる Gray はヴァージニア植民の精神性

を暗示する。ヴァージニア植民者は「美徳」「名誉」「英雄的冒険」を具現化する人達である。利益を求めてヴァージニアへ行くのではない。冒頭にイスラエル人のカナン征服を記したヨシュア記の一節を掲げ，それを英国人のヴァージニア植民に適応する。Gray は英国の人口増加とヴァージニア植民をからませ，その先例を「ヨシュア記」に求めるのである。ヴァージニア植民の場合，植民により「神の栄光が促進され，王国領土が拡大され」「国家の名誉と名声が世界の果てまで広がり，普及される」(16)。Johnson と同様の愛国心である。「ヨシュア記」の中にヴァージニア植民の先例を見い出すことで Gray はジェームズ一世をヨシュアと同一視する。旧約聖書にジェームズ一世の原型を見出すのである。なぜヨセフとヨシュアの子供達が領土を拡張したのか。それは人口増加への対処のためである。人口増加は国家が偉大であることの証であるが，限られた国土に収容される人数は自ずから限られてくる。それでヨシュアが人口急増問題解決に選んだ方法は余剰人口の国外移住であった。しかしここで問題となるのは移住先の先住民との衝突である。この問題を先住民の教化という観点から解決する。おおむね未開の地に住む先住民は真の意味での神を知らない。そこで彼らに真の神を教え，真の神への道を歩ませることが未開人にとってもまた神にとっても偉大な行為となる(17)。キリスト教の布教により未開人を改宗させるという口実のもとに植民は正当化される。野蛮な未開人は文明化されたキリスト教的支配により現世で正しく生き，来世では魂の救済が保証される。キリスト教により導かれなければ彼らは魂を失い，完全に根絶することになる。あくまでも植民者が行うことは先住民の教化である。彼らにキリスト教を教え，広めることは神の王国拡大にも通じ，一方で人口問題解決，他方では神の国建設に貢献することになる。始めに「植民」ありきで，その後に植民正当化がくる。Gray にとってヴァージニア植民の第一の目的は先住原住民の教化であり，植民は「野蛮な人々を野蛮な生活からより文明化された誠実なキリスト教の生活へ引き寄せること」(18) であり，未開人の教化を伴う植民はそれ自体が合法的となる。Gray はこのように英国内の人口問題解消，キリスト教の布教と原住民の教化をヴァージニア植民の目的として挙げるが，ヴァージニア植民に反対することは「神，王，教会，国家」への反対であるとさえ言明する(19)。植民の宗教的使

命を強調する Gray は植民の利益性についても言及することを忘れはしない。そもそもヴァージニア会社が商業的色彩の強い会社であることを考えれば会社の商業性に言及することは Gray にとっては当然であり，彼は言及しなければならない。一般の人々が宗教的説得よりも即座の利益の見返りに興味をもっていたことからも言及せずにはいられない重要事項であった。ここで Gray は単刀直入にヴァージニア植民がもたらす利益には言及しない。Gray が『ヴァージニアへのよいスピード』を書いた1609年にはヴァージニア植民についての報告や実際ヴァージニアへ行った人達が帰国し，ヴァージニア植民の現状についての情報を一般人も入手していたはずである。ヴァージニア植民からの利益に対してはよい情報はなかった。勢い植民反対の声が出てくることは必至である。Gray はそのような植民反対者に対して長い目でヴァージニア植民を考えることを要求する。現在の我々も先人の達成があればこそ恩恵や安楽な状態を享受しているのであって，我々も後生の人々のためにあるのだという[20]。現在人々はヴァージニア植民の結果がどうなるかは予想がつかない。しかし植民が即座の利益をもたらさないからといって植民から手を引くことがあってはならない。長期的に見れば必ずや植民の利益はあるはずだ，と Gray は短期的な即座の利益にはやる人々を牽制する。グレィは更に言葉を続けて永遠の備えを怠る者には確かな永遠の希望はありえず，自分のために存在する人は後生に名を残さないという。ヴァージニア植民に加わることはいわば永遠に名を残すことで，目先の利益などは眼中にあってはならない。今は何も利益はないかもしれないが長い目で見れば必ずや得る物があるという主張はこのあとの説教家特に John Donne が強く聴衆に訴えていたテーマでもあるが，即座の利益のを願う人々に早まった期待は捨てよと言う。Gray の『ヴァージニアへのよいスピード』は Johnson の『新しいイギリス』を受けて，Johnson が扱っていたヴァージニア会社の諸問題を扱っている。とりわけ Gray はヴァージニア植民を国内の人口問題解決手段として考え，それに付随する他国の植民地化の合法性，長期的な視点からの植民事業継続へと論が展開する。Gray にとってもヴァージニア植民のそもそもの目的は未開人へのキリスト教布教である。これが植民の大前提で，彼はそのために聖書から前例を見いだした。ジェームズ一世の行う

ヴァージニア植民には聖書にも前例があることから植民が合法化される。一般の人々が最も関心があった利益には直接触れず，全般的に内容がやや理想的しすぎた点もある。しかし，ジェームズ一世から勅許状を受けた会社として利益称賛だけに終始できない。『ヴァージニアへのよいスピード』はジェームズ一世を十分意識した宣伝文書としては「優等生」的な文書と言えよう。ヴァージニア会社・植民擁護の公式宣伝文書は内容は同じである。宗教的使命を帯びた植民の正当性こそが本来の植民の目的で利益は二の次である。ヴァージニア植民擁護の宣伝文書はこの主題をめぐって多くの人が様々な文書を著すことになる。次に見るのはヴァージニア会社による1610年の公式の「宣言書」である。「宣言書」はヴァージニア植民をどのように記しているか。

1610年ヴァージニア会社の理事，評議員の許可を得て，『ヴァージニアで開始した植民の目的，植民が受け入れた方法，推進された手段，神の慈悲により植民は天の王国とイギリス国家へ実りある収穫をもたらすまで不変の忍耐強い遂行のための植民についての国王陛下評議会の決意と決定に関する真実の偽りのない宣言書』という長々しいタイトルの宣言書が出版された。ヴァージニア植民に対する様々な批判，中傷，誹謗，風評からヴァージニア植民を擁護するために公式の宣言書によってヴァージニア植民の目的，方法，手段及び植民評議会の決意と結論を偽りなく述べることによって，ヴァージニア植民へ人々の関心を高めようというものであった。この宣言書でヴァージニア植民を「宗教的な高尚な実現可能な」事業と見なしていることに注目したい。植民の第一の目的は福音布教である。

> The Principall and Maine Ends...were first to preach, & baptize into Chrisitian Religion, and by propagation of that Gospell, to recouer out of the armes of the diuell, a number of poore and miserable soules, wrapt vpp vnto death, in almost inuincible ignorance; [21]

キリスト教を説き，福音の布教によってみじめな魂を悪魔の手から救出するという植民の目的はジェームズ一世の第一勅許状の文言を思わせる。ヴァージニ

ア植民の第二の目的としてスペイン対抗の基地としてヴァージニアに累壁を築くことである[22]。ヴァージニアにおける対スペイン用の防御用の砦を築くこととイギリス国内の人口増解決のためのヴァージニア植民は国内外の緊急問題を解消してくれる。最後に来るのが「利益」である。

> Lastly, the apparance and assurance of Priuate commodity to the particular vndertakers, by recouering and possessing to them-selues a fruitfull land, from whence they may furnish and prouide this Kingdome, with all such....necessities, & defects vnder which we labour, and are now enforced to buy, and receiue at the currencie of other Princes, vnder the burthen of great Customes, and heauy impositions, ... [23]

ここで言及している“Priuate commodity”はヴァージニア会社への投資からの利益ではなく，「肥沃な土地」ヴァージニアの農産物栽培から生ずる利益である。それはイギリス国内で不足し他国に依存しなければならない農産物のヴァージニアからの供給により，他国からの経済的自立を目指すイギリスの政策と一致する利益である。これまで見てきた勅許状，Johnson，Gray と同様な内容の宣言書である。最初にヴァージニア植民の宗教的使命，対スペイン政策の一環としての植民及び豊かな土地ヴァージニアからの収益，これらがこの宣言書で述べられている。Johnson や Gray と異なり先住民の土地への植民についてはそれほど詳細には触れられていないが，これまでの植民の経過を述べ，ヴァージニア植民に対して様々なうわさ，中傷が流れていた中でヴァージニア会社は必死にそれらを打ち消し，植民の正当性・妥当性を訴え，人々の植民への関心を引き起こそうとしている。同じ1610年にもう一度ヴァージニア会社への誹謗反駁のために宣言書が出版されている。『ヴァージニア植民の状態についての宣言書，非常に価値のある植民事業の不評へ至った中傷報告への反論付記』[24] がそのタイトルである。タイトルにもあるようにヴァージニア植民現状紹介とヴァージニア植民誹謗への反駁を目的として書かれた宣言書である。宣言書の著者は，ヴァージニア植民を⑴合法性⑵実現可能性⑶利益性，の三点か

ら考察し，ヴァージニア植民はいずれにも合致することを指摘する。植民の第一の目的は宗教［キリスト教］を原住民に植え付けることであり，二番目の目的は国家の名誉と利益である。更にこの世の終わりの前に福音を述べ伝えることは「決然たる真理」であるとも言う[25]。福音を異教徒に述べ伝えることは絶対的な真理であるが故に，ヴァージニア植民の合法性はたとえそれが先住民の土地への進出であっても許される行為となる。ここでも植民という海外進出が宗教の名の下に合法化されている。宣言書ではキリスト教布教の大前提のもとに植民の合法化を強調するが，それでは聖書からの植民合法性についてはどうなのか。これについて宣言書はオリゲネスの「神の行動は我々［人間］の訓令である」を引用して，創世記11章をあげる。神は「この世に多種多様な言語があるのと同じくらい多くの植民地へあの分裂した人々をまき散らす」と述べ[26]，植民は神によって始められたと言う。神以上にすぐれた始まりはなく，神の英知は疑問の余地がなく，後世に神の足跡は模倣されているとも言う。ヴァージニア植民の先例を聖書に見出し，それによってヴァージニア植民を正当化しようとするのはこれまでの方法と同様である。聖書に記されていることとヴァージニア植民は同様であると言うことによって人々の植民への疑念を取り去り，安心感を与えるのである。宣言書では聖書以外にも過去の歴史から植民の事例を引き出し，ヴァージニア植民が最初の植民ではないことを強調する。宣言書では最初に植民の宗教性を論じ，ヴァージニア植民の本来の目的をキリスト教布教に置く。それではヴァージニア植民の利益はどうなのか。ヴァージニアの土地の豊かさ，穏和な気候，統治形態，植民者の状態及び信心深い植民者の態度から植民が不可能であるはずはなく，必ずや植民は成功すると述べる。ヴァージニアの肥沃な土地に言及することはこの宣言書以前と同様で，ヴァージニア会社出版の公式文書では土地の肥沃さには必ず触れることになっている。ここで注意しなければならないことはヴァージニア会社の構成は会社に利益の還元を期待し，投資をする人と実際にヴァージニア植民へ赴いた人の二組から成っていたということである。宣言書では前者のロンドンに留まり，ヴァージニア会社へ投資し，利益を期待する人々には触れず，ヴァージニア植民者について触れているのである。ヴァージニアは肥沃な土地に恵まれており，現在イギリス

がヨーロッパ諸国に依存している産物がすべてヴァージニアで調達でき，不足するものは何もない。これほどの条件に恵まれながらもヴァージニア植民は結果が思わしくない。追い打ちをかけるように様々な悪い噂がヴァージニアからイギリスへ伝ってくる。宣言書によればヴァージニア植民の結果がかんばしくないのでヴァージニア評議会は植民の継続か中止かを議論し，ヴァージニアにいた Thomas Gates を本国に呼び寄せ，ヴァージニア植民の現状を問いただした。宣言書は Gates の報告に従い，ヴァージニアにはイギリスの必要とするものがすべて入手できると言う。木材，カイコのえさとなる桑の木（これによりイタリア産出の絹と同じ量の絹が短時間において期待できる），鉱物（ヨーロッパの鉄に匹敵する良質の鉄となる），索具の原料の麻大麻や亜麻，チョウザメのいる川，ブドウ，毛皮の材料となるビーバー，狐，リス，各種の果物，穀物（英国よりの三倍の収穫が見込まれる）等，あらゆる物が直接ヴァージニアから調達できるのである。イギリス人が他国に依存している産物が直接ヴァージニアから調達することによりイギリスの経済は自立できるという最大のメリットがある。他国からのイギリスの経済的自立の観点から見れば，ヴァージニア植民は単なる利益とか収益とかいう個人的なレベルではなくより大きな国家的なレベルの事業である。個人的な利益をヴァージニア植民から期待するのではなく国家全体の利益に資するような利益を考慮すべきなのである。他国への経済的依存を脱し，自給自足の経済を強調する宣言書はヴァージニア会社への出資者，ヴァージニア植民者に愛国心を煽ることになる。宣言書の作者はヴァージニア植民の目的をキリスト教布教に置き，植民の商業性をできるだけ希薄にしようとしている。一般人の関心が植民の利益性にあったなかで作者は意図的に宗教へ視点を移し，商業的性格の強いヴァージニア会社・植民活動を背後に移している。これら宣言書の内容は，しかし，これまでのヴァージニア会社の公式文書と比べた場合大きな違いはない。特徴としてはイギリス経済の自立をからめてヴァージニア植民を論じていることである。

ヴァージニア評議会は1612年，1609年に『新しいイギリス』の出版を許可した Robert Johnson に『ヴァージニアの新しい生活：植民以前の成功と現在の状況宣言。『新しいイギリス』第二部』(27) 出版の許可を与えた。モスクワ，東イン

ド会社総督でヴァージニア会社評議員の Sir Thomas Smith へあてて書かれたものである。その献呈で執筆の動機が明らかにされているように，それはヴァージニア植民への様々な誤解・中傷から植民事業の正当化を説き，投資家及び植民者に勇気と激励を与えようとするものである。ヴァージニア植民は国家の威信を賭け，国家の政治的・社会的・経済的諸問題の解消と対外的には大陸諸国への依存からの脱却を意図した国家プロジェクトで，単にヴァージニアの植民だけを目指したものではない。1610年の宣言書で強調されていた国家プロジェクトとしてのヴァージニア植民を Johnson は強く意識し，ヴァージニア植民当初は植民を全面的に支持する。会社の存続が危ぶまれてくる1620年前後から彼は会社及び会社関係者を批判する立場にまわるが『ヴァージニアの新しい生活』ではまだヴァージニア植民に対して協力的姿勢を示している。これまでの宣言書や宣伝文書とはやや異なりヴァージニア植民の利益性を前面に持ち出さず，ヴァージニアの過去・現在・未来に触れ，ヴァージニア植民の現状は厳しいが決して破棄されるべき事業ではないことを Johnson は強調する。我々の興味を引くのは Johnson がヴァージニア植民の現状をいかに見ているかである。Johnson は植民の目的を王，国家，キリスト教に置き[28]，商業性に触れることを避けているところがある。ただ宣伝文書の常套としてヴァージニアの肥沃な土地，豊かな自然，産物に触れてはいる。しかしこれまでの宣伝文書と異なり，直接的にヴァージニア会社及び植民からの利益は取り上げない。会社の宗教的使命について Johnson は聖パウロの異教徒改宗のための伝道活動に触れた後で次のように言う。

> This is the worke that wee first intended, and haue published to the world to be chiefe in our thoughts, to bring those infidell people from the worship of Diuels to the seruice of God. This is the knot that you must vntie, or cut asunder, before you can conquer those sundrie impediments, that will surely hinder all other proceedings, if this be not first preferred.[29]

「異教徒」を「悪魔の崇拝」から「（キリスト教の）神への奉仕」へと導くこと

がヴァージニア植民のそもそもの目的である。この改宗があって初めて植民は万難を克服し，植民の成就が可能となる。更に Johnson は先住民の改宗に留まらず，原住民の子供への教育の重要性をも説く。彼らを非文明化された状態から文明化へ教化することがヴァージニア植民者の義務ともなるからである。彼らにキリスト教を教え，教化する際には「忍耐」と「人間性」が必要で，決して暴力に走ってはならない。あくまでも平和に事を進めなければならず，かくしてヴァージニア植民から「この世の利益」が自ずと生じてくる。このように Johnson は原住民への平和的なキリスト教布教の重要性を力説すると同時にジェームズ一世はキリストに匹敵する「平和の王」となりうることを示唆する。

(F) 平和をもたらすキリスト教の布教を力説する Johnson は他方で人々のヴァージニア植民への打算的な関心を批判し，スペインへのライバル意識から即座にヴァージニアへ行くべきだと言う。特に後者のスペインとのアメリカにおける覇権争いはこれまでも論じられてきており，格別新しいことではない。スペインに遅れをとればヨーロッパのみならず新世界アメリカにおいてもイギリスはスペインに劣勢となる。新しい植民地建設は国内外の山積する問題を解決するにあたり是非成功させなくてはならない事業であり，「あのまむしのような種族」(30) のヴァージニア進出は阻止しなくてはならない。ヴァージニア植民の宗教的使命と同時に愛国心を扇ぎたて，人々の眼をヴァージニア植民へ向けさせようとする愛国者 Johnson の姿がかいまみられる。しかし，いかに高尚な理想的な理念を掲げても一般人がすぐさま諸手を挙げてその理念の実現に奔走するかは極めて疑問である。理想的な大義名分の裏にはより現実的な即座に入手できるものが必要である。ヴァージニア植民の場合それはヴァージニア会社への投資からの利益の還元であることは誰の眼から見ても明らかである。Johnson は『ヴァージニアの新しい生活』でこの問題にはできるだけ触れないようにしていたが，しかしこの利益還元という現実の問題を論ずることなしには人々をヴァージニア植民へ送ることはできない。『ヴァージニアの新しい生活』の終わり近くで Johnson は，ヴァージニアには確実な鉱物がり，イギリスへの輸送には不自由せず，有益な原料があると言う(31)。更には土壌，気候，貴重な植物と植民者に不利益をもたらすようなものはヴァージニアには何もない(32)。

「宝物」に富むヴァージニアに行かないことはない。ヴァージニアの豊かな資源，植物を見ればいかにヴァージニア植民への中傷が間違っているかが理解できる。Johnson はヴァージニア植民者の利益について言及し，ヴァージニア会社への投資者の利益についてはあまり触れていない。ただ冒険商人に全く触れていないかというとそうではなく，実際には触れているのである。Johnson は冒険商人を⑴即座の利益を期待し，植民の情勢が不利になるとすぐに植民から手を引いた人，⑵三年間で三人の冒険商人を会社へ供給することを引き受けたが最初だけで終わった人，⑶植民に対して理解を示し，時間も金も惜しまず植民遂行に熱意を示した人，この三組に分類しているが，最後の冒険商人に対してすら Johnson は利益の確約はしない。Johnson は『新しいイギリス』でも露骨にヴァージニア植民の利益には触れず，もっぱら植民の宗教的使命を強調していた。『新しいイギリス』と比較すると『ヴァージニアの新しい生活』は読者へのインパクトが弱い。それは宣伝文書と言え，『新しいイギリス』ではヴァージニア植民を聖書から援護し，文体全体に植民のイメージの拡大があり，読者を引きずり込む緊迫感があったが,『ヴァージニアの新しい生活』では聖書からの援用も少なく，作者 Johnson の熱意がそれほどに伝わってこない。宣伝文書としてはやや迫力に欠ける印象を与えないでもない。『ヴァージニアの新しい生活』で Johnson は新しいヴァージニア植民の生活を描き，世間で言われているようにヴァージニア植民が絶望的な状況にあるのではなく，植民の未来は明るいことを言いたかったのである。その観点から意図的に植民の利益，商業的活動に触れるのを避けたとも言えるが，一般人の最も関心が高かった利益を論ずることはしなかった。植民の利益については『新しいイギリス』で触れているから今更論ずることもないとジョンソンは判断したのかもしれない。いずれにせよ『ヴァージニアの新しい生活』では植民の宗教的使命が強調されて会社の商業的性格には触れられていないことは注目に値する。

1613年ヴァージニア・ジェームズタウンのピューリタンの牧師 Alexander Whitaker が現地からロンドンのヴァージニア評議会・ヴァージニア会社へ植民の現状を伝える『ヴァージニアからのよき便り』を出版する[33]。これはヴァージニア現地からの報告書であり，しかもピューリタンの牧師によって書かれてい

ることからもかなりの信憑性が期待できる報告書である。ピューリタン牧師の見たヴァージニア植民の実態はいかなるものであるか，次にこれを見てみたい。

Whitaker の『ヴァージニアからのよき便り』はタイトルから判断するとヴァージニア現地の単なる報告書の印象を与えるが，実は説教の形式を取った聖書解釈からのヴァージニア植民擁護の報告書で，ヴァージニアの現状には後半で触れているにすぎない。この報告書には同じピューリタンの William Crashaw の序文があり，そこでなぜ Whitaker が『ヴァージニアからのよき便り』を書くに至ったかを述べている。彼によればヴァージニア植民に対する様々な中傷が飛び交っており，ヴァージニア植民への人々の熱意が冷えることを恐れて Whitaker は『ヴァージニアからのよき便り』を書いたのである。Crashaw はヴァージニア植民を福音布教の観点からのみ考え，Whitaker もその使命に燃えてヴァージニアへ行ったのである。ヴァージニアにはサタンが住み着いており，そのサタンと戦うために「ヴァージニアの使徒」としてヴァージニアへ行ったのである。宗教的使命をヴァージニア植民の第一目標と Crashaw は考えるが，Whitaker が『ヴァージニアからのよき便り』を書く際に取り上げた聖書の一節は「伝道の書」11章 1 節の “Cast thy bread vpon the waters: for after many daies thou shalt finde it”「あなたのパンを水の上に投げよ。多くの日の後，あなたはそれを得るからである」である。Whitaker の意図は神の国建設を目的としたヴァージニア植民への人々の関心は専ら金銭的な利益にあり，しかも即座の利益を望む物が多いことを指摘することである。しかもヴァージニア植民の現状はおもわしくなく，当初期待していたほどの実績をあげることができないでいる。それ故，人々のヴァージニア会社・植民への投資も思うようにいかない。このような悪循環を断ち切り，停滞したヴァージニア植民への人々の関心を更に喚起するために，Whitaker は聖書の一節を解釈し，それをヴァージニア植民に適応することによって植民への精神的援助を行うのである。この手法はこれまでも見てきたように多くの宣伝文書作者が利用していたものであり，またヴァージニア会社擁護の説教家がすべて利用した手法である。Whitaker が「伝道の書」を持ち出したねらいは，ヴァージニア植民は金銭的利益が目的なので

はなくキリスト教布教がそもそも目的なのだということ，それにヴァージニア植民は神によって導かれた植民であるということである。これまでの宣伝文書とは異なり宗教的色彩が極めて強いものとなっているが，作者がピューリタンということもあってピューリタンのヴァージニア植民への態度を知るうえでも興味深い。Whitaker は「伝道の書」の一節を以下のように解釈する。つまり援助を必要としている人に物惜しみせずに施しをすれば，神はその慈善を見ているから，すぐには報いはないが現世においても来世においても必ずや神からの報いがあるというのである。

> Giue liberally thine almes to all sorts of men, that may stand in need of thy helpe: hide not thine eies at the miserable state of the afflicted; neither stop thine eares at the crie of the poore, though they be not able to recompence thy wel-doing: reproach not thine enemies, when he is punished, but rather ouercome his euill deeds withn thy goodnesse; neither suffer any to returne empty handed from there, whom God shall offer to thy liberality. [34]

神からの報いについて今は利益は期待できないが必ずや神からの報いはあるのだということを Whitaker は本書で何度も繰り返す。利益よりはまずヴァージニア植民に物惜しみせずに投資をすることが異国における神の国建設に与ることであるということを再認識すべきなのである。神の栄光のために資力を惜しむことがあってはならない。神からの報いについて Whitaker は次のようにも言う。

> ... though God doe not presently reward our well doing, but doe deter the requitall of it for many daies, yet thy good works shall not perish, but God at the appointed time, shall abundantly recompence thy liberality. [35]

「約束された時」がいつかは神のみが知ることである。しかしそのときには神は「善行」に対して必ずや報いてくれる。神からの報いに対して性急になることは

ない[36]。イスラエルがカナンに定住できるまで40年を要し，最近では東インド会社が利益をあげうまで 3 年間かかり，スペインやポルトガルが西インド諸島に土地を構え利益をあげるまで様々な困難に遭遇してきた。これらを考えるとヴァージニア植民は決してあきらめるべきではない。Whitaker は，世俗的な利益を植民に求めるのでなくむしろ神の王国建設に励むべきだと植民の宗教的使命を強調する。

> Awake you true hearted English men, you seruants of Iesus Christ, remember that the Plantation is Gods, and the reward your Countries. Wherefore, aime not at your present priuat[e] gaine, but let the glory of God, whose Kingdome you now plant, & good of your Countrey, whose wealth you seeke, so farre preuaile with you, that you respect not a present returne of gaine for this yeare or two; but you would more liberally supplie for little space, this your Chrisitian worke, which you so charitably began.[37]

神の王国を異境の地に建設することによって神は何も報いを約束しないのか。神は「伝道の書」でも「多くの日の後，得る」と言っている。神はアブラハムにカナンの地を，ソロモンには英知と富を，神の子としてキリストをそれぞれ約束し，約束に偽りはなかったことを証明している。ならばヴァージニア植民において神が約束を守らないことがあろうかと Whitaker はヴァージニア植民への神の約束の確かさを疑わない。とにかく物惜しみせずヴァージニア植民へ協力すれば，必ずや報いはあるのだ。世俗的な金銭的な利益は求めるべきではない。これまでの現地からの報告書は単なる事実の羅列に終始し，イメージの広がりには欠ける点があった。しかし，Whitaker の報告書は現役のピューリタン牧師の手になるだけに豊富な聖書からの引用・援用による説得は読者を魅了せざるをえない迫力を呈しており，従来の公式宣伝文書とは質を異にしている。何よりも特記すべきは Whitaker がヴァージニア植民の使命をキリスト教布教におき，現世的な利益還元を最小化していることである。神の国建設の使命に燃えた一ピューリタンのヴァージニアからの報告書は殊更ヴァージニア植

民の商業性には触れない。ヴァージニア植民には神の奇跡があり,「神の手」があるというが,ヴァージニアという土地そのものも神によって美化された地である[38]。Whitaker はヴァージニアの豊富な資源,産物に言及し,植民にとっては理想の地であることを示唆する。最後に次のように Whitaker が言うとき,彼は改めてヴァージニア植民の目的を高らかに掲げ,人々の心をヴァージニア植民へと煽るのである。

> ... remember that you fight vnder the banner of Iesus Christ, that you plant his Kingdome, who hath already broken the Serpents head: God may deferre his temporall reward for a reason, but be assured that in the end you shall find riches and honour in this world, and blessed immortality in the world to come.[39]

ヴァージニア植民の宗教的使命の強調はこれまでの公式宣言書や現地からの報告書では見られなかったものである。「戦闘的伝道者」「悪魔の首を折った神」及び「神の国建設」はいずれもピューリタンの特性を表すものとして興味深い。いずれにせよ俗世の富を嫌い,すべてを神のために注げというの主張はピューリタン以外の一般の読者にいかなる影響を及ぼしたかは推測の域を出ないが,ピューリタンのメンタリティを知る上で重要な報告書となっている。

1615年,ヴァージニア植民秘書 Ralph Hamor が1614年 6 月までのヴァージニアの現状報告書『ヴァージニアの現状と1614年 6 月18日までの植民成功に関する真の論説』を出版した[40]。これは主としてそれまでの植民の結果とイギリス植民者とインディアンとの友好的な関係を報告したものである。この報告書だけなら特に我々の注意を引くことはない。報告書には「読者へ」なる一文が添付されており,この小文が Hamor のヴァージニア植民への真意を読者に伝えている。なぜならそこで Hamor はやはり宗教性の強い植民を強調しているからである。最初に Hamor は次のように言う。

> ...what is more excellent, more precious and more glorious, then to conuert a heathen Nation from worshipping the diuell, to the sauing knowledge, and true

> worship of God in Christ Iesus? what more praiseworthy and charitable, then to bring a sauage people from barbarisme vnto ciuilitie? what more honourable vnto our countrey, then to reduce a farre disioyned forrainge nation, vmder the due obedience of our dread Soueraigne the Kings Maiestie? what more conuenient then to haue good seates abroade for our euer flowing multitudes of people at home? (41)

ここにはこれまで言及されてき，これ以後も繰り返し強調される植民の宗教的使命が要約されている。異教徒の悪魔崇拝からキリスト教という真の宗教への改宗，原住民の未開な状態から文明化への教化，原住民の国王への服従，及びイギリス国内の急増する人口解消策としての植民，これらを Hamor は述べる。ヴァージニア植民が単なる植民として終わるのではなく，イギリス国内の政治・社会とも密接に関連する国家的な事業であることを Hamor は読者に訴える。Hamor はヴァージニア植民への否定的な成果への一つの反論として旧約聖書の「民数記」を援用する。ヴァージニア植民と類似したエピソードをカナンの地を探索に行ったイスラエル人達の報告に見いだす。これはモーゼに命令されて約束の地カナンを探りに行ったカレブとヨシュア達の報告に関する箇所である。カナンの地を探りに行った人達のなかにはカナンの地に対して賛否両論があった。カナンは「乳と蜜の流れる地」であるが，そこに住む人達は強く，その町々は堅固で大きいのでイスラエル人は住むことができないと言う人達，それに対してカナンの地を攻撃し奪取することは可能だとモーゼに進言したカレブとヨセフである。主の命令に反し，カナンの地は征服不可能でその上下劣な中傷を言いふらす人達をモーゼは「疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし」「あなた（カレブ）を彼らより大いなる強い国民としよう」と言っている。人々の嘆きを静め，カナンの地は「非常に良い地」であり，主の命ずるままにカナンの地征服を主張したカレブとヨシュアに耳を傾けなければならない，と Hamor は言う。カレブは次のように言った。

> Let us goe up at once and possesse it, for vndoutedly we shall ouercome it; (42)

人々の中傷・批判をものともせず，ただ主の教え通りに実行すれば約束の地カナンは得られ，主からの祝福がある。しかもカナンの地をイスラエル人は武力ではなく「寛大」「愛」「友好」「宗教」によって獲得した。このように Hamor は「民数記」からヴァージニア植民を擁護し，人々を激励する。なるほど今は植民はうまくいかず，人々から中傷・批判があるかもしれないが，しかし，気にすることはない。なぜならば聖書でも同様なことがあったが神が成功へと導いてくれたからである。Hamor は，ヴァージニアをカナンに，植民者をイスラエル人にたとえ，巧みに論を展開し，ヴァージニア植民は必ず成功すると言うのである。Hamor にとって，ヴァージニアは「天上の新しいエルサレム」(43) にも等しい地である。かくしてヴァージニア植民に対し疑心暗鬼になっている人々の不安を払拭しようとする。それではヴァージニア植民のもう一つの関心事である「利益」についてはどうか。Hamor はこれについて次のように言う。

> what more profitable then to purchase great wealth, which most nowadaies gape after ouer-greedily: all which benefits are asssuredly to bee had and obtained by well and plentifully upholding of the plantation in Virginia.(44)

現地からの豊富な産物を購入すれば利益は必ず生ずる。とにもかくにもヴァージニア植民事業を支持し，会社に投資をすればよいのである。そして賛同者はただ真面目な植民者を現地へ送れさえすれば，結果は自ずと明らかとなる。そして利益を性急に求めてはならないとも言う。

> As for profit it shall come abundantly, if we can with the husband-men, but freely cast our corne into the ground, and with patience waite for a blessing.(45)

Hamor は植民の商業性については多く言及しない。ただ植民の収益性については確約できることを強調している。Hamor は植民の主要な目的を異教徒の改宗とし，その収益性については軽く触れているだけである。ただ辛抱強く待てさえすればよいのである。Hamor のヴァージニア植民擁護はこのようにそ

の宗教的使命及び収益性からなるが，それは従来の主張と変わるところはないのである。

ヴァージニア会社は1624年の解散まで更に二編の宣言書を出版する。1620年の『ヴァージニアの植民と状態と事態に関する宣言書：冒険商人と植民事業で生命の危険にさらされた全ての人々の名前を付す』[46] と1622年の Edward Waterhouse の『ヴァージニアの植民地の状態に関する宣言書』[47] である。以下これらのなかでヴァージニア植民がいかに報告されているかを見てみたい。

4

1620年前後はヴァージニア植民統治に関して重大な変化が生じようとしていた時期であった。ジェームズ一世がヴァージニア植民総督選挙に直接干渉し，時の総督 Sir Edward Sandys の更迭を要求してきたからである。ジェームズ一世はヴァージニア植民評議会が本国の希望に反し，民主的な選出方法で総督を選ぼうとしていたことに難色を示していた。Sandys はヴァージニア植民の歴史においては燦然たる名を残すが，ジェームズ一世からは本国の指令通りに行動しないことで反感を買っていた。このような時期にヴァージニア会社は1620年 6 月22日宣言書を出版する。ここではジェームズ一世のヴァージニア植民統治への不満は触れられておらず，専らこれまでと同様ヴァージニアが不毛で利益をもたさらないとのうわさが虚偽で悪意に満ちたものであることに反論しているだけである。従来の公式宣伝文書と同様，いかにヴァージニアが肥沃で広大でかつ十分な水に恵まれているかを，穏和な気候，健康的な風土，豊かな自然への賛美とからませて，世間の批判に答えている。植民に専念する人々にとってヴァージニアは神の摂理によってイギリスに取っておかれた土地であり，王と国家にとっては力となり名誉となる土地である[48]。ヴァージニアは「世界のほとんどの地域の最も豊かな必需品」を産出し，現在ロシア，ノルウェイ，デンマーク，ドイツ，フランス，スペイン，ペルシア，イタリアに依存している産物を直接ヴァージニアで入手可能であることを指摘する。イギリスのヨーロッパ諸国からの経済的自立についてはこれまでも論じられてきており，この

宣言書が初めてではない。ヴァージニア植民を悪く思ったり中傷したりする人は「無知な人」か「腐敗した心」と「邪な意図」を持った人であると言う(49)。ヴァージニア植民の正当性をこの宣言書では植民の現状を見ることによって訴える。最初に考えなければならないのはこれまでの植民者の数である。宣言書には「1619年に会計係と会社によってヴァージニアへ送られた船舶，人員，食糧メモ」が付記されており，1619年のヴァージニア植民者1,200人が列挙されている。この数字から見てもヴァージニア植民への人々の理解が薄れたとは思われない。更にヴァージニアでは植民の運営･管理も整然としており，「公平と運営の賞賛すべき形態」(50) が見られ，何ら問題はない。これまでのようにヴァージニア植民の宗教的使命や商業的性格をこの宣言書では全面的に扱わない。ただ冒険商人に対しては12ポンド10シリングで100エーカーの土地が手に入ることに触れているが，出資者がへの即座の利益還元は取り上げていない。ヴァージニアの自然条件から利益の還元が保証されることは言うまでもないと言いたいのであろうか。とにかくヴァージニア植民の現状を見れば，この植民がいかなる性格の植民であるかが理解できる，と宣言書は訴えたいようである。宣言書の最後で「この輝かしい事業は全能の神についての真なる奉仕を伝え，我がイギリス王へ偉大さと名誉を付け加え，多くの国内の人々を処理するにあたっての全イギリス国民の利益へと向かう」(51) と言うとき，やはりヴァージニア植民の目的をキリスト教布教，国王への名誉及び急増人口問題解決に置いているのである。最後の文言はこれまでの公式宣伝文書に則した文言であるが，いずれの文書にもこれらの文言が表れるということはキリスト教布教というヴァージニア植民の目的がたとえそれが表向きの目的であったとしても共通の認識であったと言えるだろう。

1622年８月，Edward Waterhouse は『ヴァージニア植民の現状に関する宣言書：３月22日イギリス人への原住民異教徒によって平和と盟約の時に裏切り行為により行われた入植者への残虐な大虐殺に関する報告を付す』を当局の検閲を得て出版した。この宣言書は二つの意味において興味深いものである。一つは1624年にヴァージニア会社が解散するが，その２年前に書かれているということである。ジェームズ一世はヴァージニア植民の統治・管理に意義を唱え，

総督人事に介入した。それに対しヴァージニア植民側は徐々に本国からの影響を脱し，自らの手による選挙によって総督を選び，本国の意図とは裏腹に「民主的に」ヴァージニア植民を管理しようとした。もう一つは宣言書にもあるように宣言書出版 3 ヵ月前の 3 月22日にインディアンの襲撃を受け，347名が殺害されたことである。これはインディアンとの友好関係にあったとされていたなかでヴァージニア植民の歴史においては衝撃的な事件であった。このような緊迫した状況のなかで Waterhouse は依然として従来通りにヴァージニアの肥沃な土地，豊かな資源を賛美し，イギリスが他国への経済的依存から脱却できることを強調しているのである。1620年の宣言書と酷似した内容で，1620年の宣言書も Waterhouse が書いたのではないかと思わせる。たとえば次の文章は上に引用した文章と同一である。

> To conclude, ... it［Virginia］is a Countrey which nothing but ignorance can thinke ill of, and which no man but of a corrupt minde & ill purpose can defame.(52)

Waterhouse は，ヴァージニア植民の現状を土地の肥沃さ，豊富な資源，植民の実績から擁護し，人々の植民への不安を取り除こうとしている。これまでは1620年の宣言書の繰り返しで，格別新しさはない。1622年の宣言書で注目すべきはここで Waterhouse が同年 3 月のインディアン襲撃に直接言及し，インディアンへの強硬な態度を表明していることである。これまでインディアンはイギリス人と比較的友好的な関係にあったが，彼らの裏切りにより347名ものイギリス人が殺害され，その名前はすべて記されている。インディアンはイギリス人の恩に仇で返すような残虐な行動をし，Waterhouse は彼らの裏切り行為を激しく攻撃し，「まむしのような種族」「邪悪な異教徒」(53) への露わな感情を示している。Waterhouse はこの事件を契機に⑴裏切り行為への処罰，⑵インディアンの土地の没収，⑶インディアンの産物のイギリスの所有，⑷インディアン教化よりは征服，⑸奴隷としてのインディアン使用，⑹インディアンの虐殺事件の今後への教訓，⑺インディアン襲撃事件をイギリス人慰めの契機とすること，

を強調する。ヴァージニア植民擁護者・支持者として Waterhouse はインディアン襲撃事件を単なる事件として終わらせることはしない。Waterhouse は，歴史を見ても大事業には必ず大惨事や危害がつきもので，ヴァージニア植民が経験したインディアン事件もイギリスが大事業を行っている証である。大国は幾多の困難を経て初めて偉業を達成できると檄をとばすのである。災い転じて福となる。「不断の努力」と「勇気」で難局にあたるべきで[54]，植民の機は熟している。

> To conclude then, seeing that Virginia is most abundantly fruitfull, and that this Massacre must rather be beneficiall to the Plantation then impaire it, let all men take courage, and put to their helping hands, since now the time is most seasonable and aduantagious for the reaping of those benefits which the Plantation hath long promised: [55]

幾分扇情的な印象も免れないが，インディアン襲撃事件後のヴァージニア植民への疑念・不安除去のためにはこれ位の檄は必要であった。インディアン襲撃を悲観的に見ないで逆境をばねに更なる植民遂行へと読者を駆り立てるレトリックの強い文章である。これまでの宣伝文書に見られたヴァージニア会社の宗教的使命や利益性にはほとんど触れていないが，ただ12ポンド10シリングの出資に対する100エーカーの土地の提供については前回同様触れている。全体的なまとめとして Waterhouse は次のように言う。

> Lastly, it is to be wished, that euery good Patriot will take these things seriously into his thoughts, and consider how deeply the prosecution of this noble Enterprise concerneth the honor of his Maiestie and the whole Nation, the propagation of Christian Religion, the enlargement, strength, and safety of his Maiesties Dominions, the rich augmentating of his Reuenues, the imploiment of his Subiects idle at home, the increase of men, Mariners and shipping, and the raising of such necessary commoditie, for the importaion of which from forren

Countries so great and incredible summes are continually issued and expended.[56]

ここにヴァージニア植民の目的がすべて列挙されている。ヴァージニア植民は⑴国王と国家全体の名誉，⑵キリスト教の布教，⑶国王領土の拡張，教化，安泰，⑷国家収入の増大，⑸無職者の雇用，⑹植民者，水夫，輸送の増加，⑺必要産物の栽培，に関わる「崇高な事業」である。ヴァージニア会社が単なる商業的事業ではなく国家全体に関わる事業であることを Waterhouse は述べる。これらすべてはこれまで論じられてきたことであって，Waterhouse はそれを繰り返しているにすぎない。ただここでもキリスト教布教をヴァージニア植民の目的の一つに挙げていることに注目したい。Waterhouse の宣言書の新しさはインディアン襲撃事件に言及したことで，John Smith は1624年出版の『ヴァージニア，ニュー・イングランド，サマー諸島史概説』のインディアン襲撃事件記述（第四巻）でほとんどすべて Waterhouse の記述に従っている[57]。Waterhouse はインディアン襲撃事件を更なる植民の発展の契機となしえることを強調し，ヴァージニア会社及び植民者を励ます。彼がキリスト教布教や植民の利益性にそれほど言及していないことは従来の宣伝文書の定石からすればルール違反の感がないでもないが，巧みに読者を植民へと煽る彼のレトリックにはヴァージニア会社擁護の説教を思わせるものがある。その意味ではヴァージニア植民の現状に関する彼の宣言書は植民の将来への疑念を払拭する効果があったと言えよう。

むすび

1606年12月19日，Susan Constance 号，Godspeed 号，Discovery 号の三隻の船がテムズ川北岸から104人の植民者と39人の乗組員と共にヴァージニアに向けて出航した。これがイギリスによる北アメリカ植民の第一歩であった。４ヵ月に渡る航海の後，1607年４月26日船はチェサピーク湾に入り，最終的に５月14日にジェームズ川に投錨し，本格的なヴァージニア植民が始まった。入植者が足を踏み入れたヴァージニアは決して「楽園」ではなかった。入植は過酷を極め，

1607年の終わりまでに入植者の104人中，生き残ったのは38人であった。この植民の目的は三回にわたる勅許状が記しているように「福音」の普及にあったのか。この問題を本論では各種の一次資料に検討を加えることによって明らかにすることを試みた。結果として言えることはヴァージニア植民にあっては異教徒へのキリスト教布教は二次的な問題で，植民による金銭的な利益が第一の目的であったということである。しかし，ロンドン・ヴァージニア会社は植民の第一の目的を「利益」よりも異教徒へのキリスト教布教とした。なぜヴァージニア会社が植民の宗教的使命を強調したのか。その理由はいろいろと考えられようが，その一つは異国の地の植民に際しては世俗的な金銭よりも原住民の精神的・文化的教化という大義名分が対外的には聞こえがよかったということである。もう一つの理由はスペインの植民地政策にあると言える。南米でのスペインの行為はキリスト教布教を隠れ蓑にした他民族支配と現地での金銀発掘であった。ヴァージニア会社は当然のことながらスペインの中南米での植民の実態を知っていた。それで会社はヴァージニア植民はスペインとは異なる植民であり，それは単なる金儲けのための植民ではなく，あくまでも異教徒インディアンのキリスト教改宗にあることを強調したのである。様々な文書がこれを幾度となく強調していたことは上で見た通りである。Robert Hunt なる説教家がヴァージニアへ同行した記録はあるが，インディアン改宗の実績は乏しい。インディアンのキリスト教徒改宗が全く失敗したということではない。John Smith を処刑直前に救った伝説的な先住民女性 Pocahontas のキリスト教への改宗と彼女のイギリス人 John Rolfe との結婚はヴァージニア会社にとっては格好の宣伝材料であった。それでもなおイギリス人によるヴァージニア植民の実態も利益を目指した植民であることには変わりはなかった。興味深い事実は，Susan Constance 号の船長 Christopher Newport は実はヴァージニア会社からヴァージニアでの金の採掘を命じられていたということである。彼は1607年 7月22日にイギリスに向けてジェームズタウンを出航したが，その際，彼はヴァージニアから岩石を持ち帰った。Newport はその岩石には金が含まれていると考え，ヴァージニア会社の有力な支援者に手紙でその旨を伝えた。結局その岩石には金は全く含まれていなかった。Newport は見本の岩石は間違った岩

石だと弁明し，もう少し忍耐強く待ってくれれば必ず金をヴァージニアから持ち帰ってくることができると信じて疑わなかった。更に興味深いことに1608年から1610年には金精錬者がジェームズタウンに送られていた記録がある。また，John Smithは「金を掘り，金を洗い，金を精錬し，金を積荷するのだという夢のようなこと以外には何の話しも，希望も，仕事もしなかった」とその『ヴァージニア，ニュー・イングランド，サマー諸島史概説』で書いている(58)。このような事実があってもヴァージニア植民の宗教的使命が様々な文書で強調され続けていたことに我々は少なからずの驚きを覚える。入植者がヴァージニアで行ったことは現地調査とヴァージニア経由の中国への通路発見であった。結局，ヴァージニアでは金銀も中国への通路も発見されなかった。スペインがヴァージニア植民から撤退したのもヴァージニアにおける金の発掘見込みの皆無をいち早く看破したからであった。ヴァージニアに金が発見され，スペインがヴァージニアを征服していたならば，今日のアメリカはどうなっていただろうかと考えると，ヴァージニアに金が発掘されなかったことはアメリカの将来にとってはむしろよかったのかもしれない。入植者がヴァージニアに求めた「金」はついには発見されなかったが，ヴァージニアはアメリカの未来にとっては貴重な「金」であったのである。

注

(1) Perry Miller: *Errand into the Wilderness*（Massachusettes: Harvard University Press, 1956），Chapter Ⅳ参照。

(2) S. M. Kingsbury（ed.）: *Records of the Virginia Company of London*（Washington. D.C.: Government Printing Office, 1906-1935）, vol. Ⅰ, p. 23.

(3) ハクルート「西方植民論」（東京：岩波書店『イギリスの航海と植民二』，1985），特に第20章参照。

(4) *The Three Charters of the Virginia Company of London with Seven Related Documents; 1606-1621* with an Introduction by Samuel M. Bemiss（Virginia, 1957）, p.2.

(5) 『イギリスの航海と植民　二』（東京：岩波書店，1985），p.19, p.20.

(6) Bemiss, p.15.

⑺ Bemiss, p.54.
⑻ Bemiss, p.57.
⑼ Bemiss, p.76.
⑽ Robert Johnson: *NOVA BRITANNIA*（Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1975）, B.
⑾ Johnson, C2.
⑿ Johnson, C2.
⒀ Johnson, C.
⒁ Johnson, C2.
⒂ *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker*（New York, 1976）, A3.（以下 *Early Accounts* と略記。）
⒃ *Early Accounts*, B2.
⒄ *Early Accounts*, C2.
⒅ *Early Accounts*, C3.
⒆ *Early Accounts*, D2.
⒇ *Early Accounts*, D.
㉑ “A True and Sincere Declaration of the purposes and ends of the plantation begun in Virginia, of the degrees which it hath received, and means by which it hath been advanced, and the resolution and conclusion of His Majesty's council of that colony for the constant and patient prosecution thereof, until by the mercies of God it shall retribute a fruitful harvest to the Kingdom of Heaven and this commonwealth”（London, 1610）, A3. 以下“A True and Sincere Declaration” と略記。）
㉒ “A True and Sincere Declaration”, A4.
㉓ “A True and Sincere Declaration”, A4.
㉔ “A True Declaration of The estate of the Colonie in Virginia, With a confutation of such scandalous reports as have tended to the disgrace of so worthy an enterprise”（London, 1610）. 以下“A True Declaration” と略記。）
㉕ “A True Declaration” B.
㉖ “A True Declaration”, A3.
㉗ Robert Johnson: *THE NEW LIFE OF VIRGINEA: Declaring the Former Successe and Present Estate of that Plantation, being the second part of Noua Britannia*（Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1971）以下“*THE NEW LIFE OF*

VIRGINEA” と略記。

⑱ “*THE NEW LIFE OF VIRGINEA*”, D3.

⑳ “*THE NEW LIFE OF VIRGINEA*”, E3.

㉚ “*THE NEW LIFE OF VIRGINEA*”, G3.

㉛ “*THE NEW LIFE OF VIRGINEA*”, G3.

㉜ “*THE NEW LIFE OF VIRGINEA*”, G3.

㉝ *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker*（New York, 1976）. 以下 *Early Accounts* と略記。Whitaker は Pocahontas の教育にあたり，彼女のキリスト教徒改宗に大きな影響を及ぼした人物である。

㉞ *Early Accounts*, E.

㉟ *Early Accounts*, G3.

㊱ *Early Accounts*, H2.

㊲ *Early Accounts*, H3.

㊳ *Early Accounts*, I.

㊴ *Early Accounts*, I3.

㊵ Ralph Hamor: *A true discovrse of the present estate of Virginia*（Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc., Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1971）.

㊶ Hamor, G3.

㊷ Hamor, H.

㊸ Hamor, H2.

㊹ Hamor, G3.

㊺ Hamor, H.

㊻ “A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in VIRGINIA: with the Names of the Adventurers, and Summes Adventured in that Action”（Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1973）.

㊼ Edward Waterhouse: “A Declaration of the State of the Colonie in Virginia with a Relation of the Barbarous Massacre in the Time of Peace and League, treacherously executed by the Natiue Infidels, vpon the English, the 22 of Mrach last”（Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1970）.

㊽ “A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in VIRGINIA”, A.

㊾ “A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in VIRGINIA”, B.

㊿ “A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in VIRGINIA”, B.

⑸1) “A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in VIRGINIA”, B3.

(52) Waterhouse, B3.

(53) Waterhouse, D.

(54) Waterhouse, E3.

(55) Waterhouse, F.

(56) Waterhouse, F.

(57) John Smith: *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summers Isles*（Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1966）, p.105 ff.

(58) John Smith, P.53.